

# 成人用感覚感受性尺度作成の試み<sup>注1</sup>

中京大学大学院心理学研究科 船橋 亜希<sup>注2</sup>

## An attempt of developing "Sensory Sensitivity Scale" for Japanese adults

FUNAHASHI, Aki (Graduate School of Psychology, Chukyo University)

This study attempted to develop the "Sensory Sensitivity Scale" for Japanese adults. In the first part, undergraduates (n=351) rated for 115 items collected from various sources. By analyzing their responses, "Adult Sensory Sensitivity Index" (ASSI) of 28 items was finally fixed. The scale proved to have single-factored structure and internal consistency. In the second part, ASSI was administered to another undergraduates (n=271). The test-retest analysis over five weeks confirmed its high stability. Also, responses with ASSI showed a construct validity for relationship either with emotionality of Big Five or STAI.

**Key words:** sensory sensitivity, scale construction, highly sensitive person

### 問題

感覚の個人差については、これまで心理学のいくつかの領域で研究が行われ、その事実が広く認められている。しかしながら、この個人差は自閉症スペクトラム障害児の感覚処理障害の問題として取り上げられる以外、十分な検討がなされていない(船橋, 2012)。感受性の高さについて諸家の説明を参考に筆者なりに定義すると以下ようになる。感覚感受性の高さとは、「些細な刺激にも気づき、その刺激に反応し、われわれ人間は刺激に対して慣れが生じるが、たとえその慣れが生じても刺激に対してすぐにまた反応し、そして感覚の閾値の変動がほとんどないこと」をいう。この事実を示すものとして「感覚処理感受性」(Sensory-Processing Sensitivity : SPS)なる概念が提起された(Aron & Aron, 1997)。SPSの高い人は外的刺激によって過覚醒状態に陥り、不快を感じやすい(Aron, 2010)。SPSは向性や行動抑制と類似しているが、異なる概念とされる(Aron & Aron, 1997)。それは安定した気質的特徴(Dunn, 2001)であり、生物学的基礎をもち、およそ15から20%の人たちにみられる(Kagan, 1994)。これまでの研究で、SPSの高さは、社会的内向性

(Aron, 2006)、抑うつや不安の高さ(Liss, Timmel, Baxley, & Killingsworth, 2005)、自己効力感、疎外感、否定的情動、ストレスの高さ(Evers, Rasche & Schabracq, 2008)との関連が報告され、否定的な感情やパーソナリティとの関係が示唆されている。SPSに似た概念として感受性に関しては、不安や不安に関連した感覚に対する恐怖を表す「不安感受性」(Anxiety Sensitivity : AS)がある。ASは予期不安や破局的認知の基礎となるものであると定義される(Reiss & McNally, 1985; Reiss, Peterson, Gursky, & McNally, 1986)。ASは主観的不安や不安時の身体感覚を恐れることで、不安障害を引き起こす可能性が高いことが予測されており、Reiss et al (1986)は16項目からなる不安感受性指標(Anxiety Sensitivity Index : ASI)を開発した。しかし、ASは外部刺激の存在は想定しておらず、認知的側面に焦点を当てていること、ASは介入により変動するなどの点がSPSと異なる。

Aron & Aron (1997)は、感受性の高い人にみられる共通性を検討して27項目からなる「高感受性者尺度」(Highly Sensitive Person Scale : HSPS)を開発した。しかし、この尺度には創造性や誠実性、美的な感受性までも含まれ、感覚感受性に限られた尺度ではない。また、彼らは尺度の一次元性を仮定したが、その後の研究では異なる所見がいくつか報告されている。例えば Smolewska, McCabe & Woody (2006)は、HSPSの一次元性

注1 本論文は2007年度中京大学大学院心理学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。

注2 funahashiaki@yahoo.co.jp

に疑問を抱き、低感覚閾 (low sensory threshold), 易興奮性 (ease of excitation), 美的感受性 (aesthetic sensitivity) の3因子から成るとした。また, Evans & Rothbart (2008) は, 「成人気質質問紙」 (Adult Temperament Questionnaire) を使用して HSPS との関連を検討し, HSPS が2次元構成であると主張している。

感受性の個人差を測る尺度としては, HSPS 以外にも開発が試みられてきた。「成人用感覚プロフィール」 (Adult Sensory Profile) は, 自閉症スペクトラム障害者の感受特性を測るツール (Brown, Tollefson, Dunn, Cromwell, & Fillion, 2001) であり, 日本版の標準化が行われている (辻井, 2012)。しかし, これは一般成人には適用できない。

本研究では, SPS の概念にもとづき, 感覚感受性の高い成人を判別するための新たな尺度を作成することを目的とする。第 1 部では, 基礎的検討をふまえて日本人成人を対象とする「成人用感覚感受性尺度」 (Adult Sensory Sensitivity Index : ASSI) を創案し, 第 2 部では, ASSI の尺度構成, 信頼性と妥当性を吟味するとともに, 関係があると考えられる心理特性との関連性について検討する。あわせて, ASSI を創案する試みの臨床的意義についても論じる。

## 第 1 部

### 目的

成人用感覚感受性尺度作成のために項目を収集し, 最終候補に残る項目選定を目的とした。

### 方法

項目収集と選定 刺激に対する敏感さを尋ねる項目を著者自身が考えた項目と関連文献から幅広く収集した。次に心理学専攻の大学院生 13 名に協力を依頼し, 調査内容を説明した上で項目を集めた。さらに A 大学心理学部 3 年生と 4 年生の大学生 66 名に心理学の講義時間中に「敏感な人と聞いてあなたはどのような人を思い浮かべますか?」, 「敏感さの特徴」について自由記述で回答を依頼した。収集した項目を感覚器官別に「知覚」「情動・認知」「行動」の3つのレベルに分類し, 内容が重複しているものを削除した結果, 132 項目の試案が完成した。再度, 項目収集協力をお願いした大学院生と内容を検討した結果, 最終的に 115 項目が選択された。

調査協力者 A 大学の大学生 403 名 (有効回答数 351 名) であり, 内訳は, 男性 236 名, 女性 115 名, 平均年齢 20.0 歳 (18 歳 ~ 28 歳, SD 1.22) であった。心理学部の学生は調査 2 の協力者となるため, 心理学部以外の学生を対象とした。

調査項目 所属学部・学年・性別・年齢の記入と予備調査により選択した刺激に対する感覚の感受性を測る 115 項目について 5 件法で回答を求めた。「まったくあてはまらない」を 0 点, 「あまりあてはまらない」を 1 点, 「どちらともいえない」を 2 点, 「ややあてはまる」を 3 点, 「とてもよくあてはまる」を 4 点とし, 回答を得点化した。質問項目は, 文章の長さが短いものから順に並べ, 感覚器官の属性や類似した項目内容が続かないようにした。

手続き 調査は, 大学の講義時間内に無記名で, 集団方式で実施した。調査開始時に文書と口頭で, 調査用紙の管理は厳重に行なわれ, 個人のプライバシーは厳守されることを調査協力者に伝え, そのような手続きによる調査に同意した学生に回答を求めた。調査に要した時間は約 15 分であった。分析は, 統計パッケージ SPSS (Ver. 15.0J, SPSS Inc. 社) を用いた。

## 結果

得点分布 平均値から標準偏差をマイナスした結果が 0.1 以下の項目をフロア効果がみられた項目とし, 11 項目を削除した。平均値に標準偏差を足した結果が 3.8 以上の項目を天井効果がみられた項目とし, 6 項目を削除した。合わせて 17 項目を削除し, 98 項目となった。

Good-Poor (G-P) 分析 特定の一つの得点の動きが, 全体得点の動きと関連しているかを確認するために G - P 分析を行った。98 項目全体の合計得点を算出し, 平均値を基準に高群 (n = 175) と低群 (n = 176) に分け, 両群の各項目の平均点が群間で統計的に有意な差があるか t 検定を行った。高群と低群の間に差がみられなかった 12 項目を削除した結果, 86 項目となった。

Item-Total (I-T) 相関分析 目的は, G - P 分析と同じである。上位群下位群の t 検定の代わりに, 項目全体得点 (Total) と各単一項目 (Item) との相関係数を求めた。まず, 86 項目のうち相関係数が 0.30 以下の 19 項目を削除し, 再度相関係数を求めた結果, 相関係数が 0.30 以下の 3 項目をさらに削除した。

項目の決定 64 項目について、以下の分析を行い、項目内容を分析結果とともに検討し、協議により最終的な項目を決定した。

1. 反応偏向項目 各項目について、「まったくあてはまらない」、「あまりあてはまらない」の回答頻度の合計、「ややあてはまる」、「とてもよくあてはまる」の回答頻度の合計のいずれかが、男女ともに全体の 60% (男子学生 142 名, 女子学生 69 名) 以上を占めているものを、反応偏向項目とし、16 項目が該当した。
2. 因子分析 尺度は一次元性を仮定しているため、主因子法における回転前の第 1 因子を参照した。因子負荷量が低い項目は一次元に乗らない項目と判断した。主因子法による因子分析を実施した結果、因子付加量が 0.4 以下となった項目が 14 項目みられた。
3. 平均値の性差 下位尺度ごとの平均得点に性差があるかを確認するために、t 検定を行なった結果、19 項目に有意差がみられた。

以上の分析結果より、64 項目のうち、反応の偏りが見られた 16 項目、因子負荷量の低かった 14 項目、性別により差がみられた 19 項目を削除対象として最終的に採択する項目を以下のプロセスで検討した。当初、この尺度では、刺激に対する知覚の感受性の高さ、それに続く情動および認知、行動の 3 側面を含んだ項目を選択していた。しかし、因子分析の結果、行動面に関する項目は、一次元構造を支持しない項目が多かったため 行動特徴は個人差が大きいと判断し、この尺度の項目を最終的に知覚と情動および認知の 2 側面に限定した。研究の目的と上記の分析結果をもとに、各感覚器官の知覚と情動および認知の二つの側面を表す項目をバランスよく配置するために、研究目的を理解している心理学を専攻する大学院生 7 名と協議を行なった。その結果、36 項目を除外し、最終的に 28 項目を採択した。

## 第 部

### 目的

第 部で作成された 28 項目からなる成人用感覚感受性尺度 (Adult Sensory Sensitivity Index : A SSI) の尺度構造を確認した後、信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とした。また、感覚感受性が高い人は、Big Five Scale の下位尺度である情緒不

安定性 (神経症傾向) および STAI の状態不安・特性不安との間に正の相関があると予想されることから、その当否の吟味を試みた。

### 方法

調査協力者 A 大学心理学部に所属する 1 年生から 3 年生の大学生 271 名に協力を得た。性別の内訳は男性 118 名, 女性 153 名で、平均年齢 19.35 歳 (18 歳から 39 歳, SD 1.84) であった。検査 - 再検査法による信頼性の検討を行うため、そのうちの 47 名 (男性 11 名, 女性 36 名) に再調査に協力を得た。平均年齢は、20.30 歳 (19 歳 ~ 39 歳, SD 3.18) であった。再調査は、5 週間の間隔を経て同一の調査を実施した。

### 調査項目

質問紙の構成 所属学部・学年・性別・年齢、再調査協力者には学籍番号の記入を求めた後、次の 3 つの質問紙に回答を得た。

#### 1. ASSI

第 部で選択した 28 項目について「全くあてはまらない」を 1 点、「あてはまらない」を 2 点、「あまりあてはまらない」を 3 点、「どちらともいえない」を 4 点、「ややあてはまる」を 5 点、「あてはまる」を 6 点、「非常にあてはまる」を 7 点の 7 件法 で回答を求めた。第 部の項目選定の際は、115 項目に回答する実施時間を考えて、回答形式は 5 件法を採用したが、本調査では 7 件法で評定を求めた<sup>注3</sup>。質問項目は Table1 に分析結果とともに示した。

#### 2. Big Five 尺度

Big Five 尺度 (和田, 1996) は、5 つの下位尺度からなり、各下位尺度 12 項目の計 60 項目からなる。下位尺度ごとの信頼性は高く、内的一貫性を有し、併存的妥当性および収束的妥当性が高いことが確認されている。この Big Five 尺度をもとに荻生田・繁樹 (1995) が、各因子に安定して寄与する項目を精選した 20 項目からなる短縮版を使用した (以下 BF20 とする)。項目内容を Table 2 に示した。20 項目それぞれについて上述の ASSI と同じく 7 件法で回答

注 3 筆者はより詳細な反応の幅を必要として 7 件法を採用したが、5 件法を 7 件法に変えても実際に差がないという指摘もある (村上, 2006)。

Table 1 ASSI 全項目の平均値・標準偏差, 主成分負荷量および相関係数

No.	Item	平均点			性差 t 値	主成分 負荷量	相関係数		
		全体	男性	女性			全体	男性	女性
1	明るいところよりも暗い場所にいると落ち着く	4.42	4.71	4.20	2.65 **	.62	.23	.23	.31
2	痛みに敏感である	4.34	4.37	4.31	0.38	.71	.29	.18	.40
3	衣類の素材が合わないとかゆくなる	4.23	3.93	4.46	-2.40 *	.60	.48	.40	.52
4	大きな音に対して、過剰に反応する	4.64	4.25	4.94	-3.58 **	.67	.50	.35	.57
5	お風呂やシャワーの温度を気にする	4.52	4.53	4.51	0.13	.44	.42	.26	.56
6	かすかな物音でビクビクする	3.65	3.19	4.00	-4.19 **	.65	.60	.61	.56
7	家庭用電化製品の騒音(ノイズ)が神経にさわる	3.56	3.40	3.69	-1.40	.59	.50	.56	.45
8	環境の変化をすぐさま感じ取ることができる	4.26	4.18	4.33	-0.08	.57	.37	.27	.44
9	空腹になると気分が悪くなる	3.93	3.57	4.22	-3.13 *	.54	.38	.42	.32
10	蛍光灯のちらつきが気になる	4.60	4.43	4.73	-1.40	.49	.51	.45	.55
11	興奮して、なかなか眠れないことがある	4.11	4.04	4.16	-0.06	.37	.36	.34	.38
12	怖がりである	4.76	4.31	5.10	-4.07 **	.65	.35	.34	.30
13	室内にいて、エアコンやエレベーターの振動が気になる	3.22	3.03	3.36	-1.60	.57	.53	.48	.56
14	たくさんのことが自分の周りで起こっていると、不快になる	4.32	4.17	4.44	-1.38	.62	.44	.36	.50
15	小さな地震も察知できる	3.50	3.31	3.65	-1.64	.68	.26	.14	.31
16	ちょっとした気温の変化に気づく	3.40	3.22	3.54	-1.89	.68	.46	.43	.46
17	突然の物音に心臓が止まりそうなほど驚く	3.34	2.87	3.69	-3.84 **	.63	.57	.50	.59
18	何か視野に動くものが入っていると集中できない	4.15	3.95	4.31	-1.86	.49	.52	.47	.55
19	日常生活の雑音(掃除機の音など)が気になり、イライラする	3.57	3.55	3.59	-0.18	.57	.58	.56	.62
20	皮膚がかぶれやすく、すぐ赤くなったり、腫れたりする	3.47	3.53	3.42	0.48	.77	.40	.32	.48
21	皮膚の感覚は、異常に敏感だ	3.50	3.43	3.56	-0.60	.74	.46	.37	.54
22	部屋が乾燥していると、すぐに気がつく	3.42	3.13	3.65	-2.86 **	.54	.45	.48	.40
23	他の人よりも疲れやすい	4.25	3.93	4.49	-3.06 **	.61	.42	.33	.45
24	周りの人の喋り声をうるさく感じる	4.04	4.07	4.01	0.28	.70	.46	.41	.51
25	周りの表情や声のトーンなどに敏感に反応する	4.62	4.28	4.88	-3.24 **	.51	.45	.41	.44
26	よく胃が痛くなる	3.24	2.90	3.50	-2.67 **	.69	.41	.45	.36
27	よくぼーっとしていると言われる	4.35	3.92	4.69	-3.66 **	.48	.26	.14	.29
28	外を走る車やトラックの振動に悩まされる	2.84	2.86	2.83	0.13	.59	.53	.55	.55

\*\* p < .01 \* p < .05

Table 2 Big Five Scale 短縮版の評定項目

性格特性	評定項目 (各4項目)
外向性: E	話し好き, 無口な <sup>a)</sup> , 陽気な, 外向的
情緒不安定性: N	悩みがち, 不安になりやすい, 心配性, 気苦労の多い
経験への開放性: O	独創的, 進歩的, 洞察力のある, 想像力に富んだ
勤勉性: C	いい加減な <sup>a)</sup> , ルーズな <sup>a)</sup> , 怠惰な <sup>a)</sup> , 計画性のある
協調性: A	温和な, 寛大な, 親切的な, 協力的な

a) 逆転項目

を求め、回答値を合計して尺度得点を算出した。ただし、逆転項目は7点を1点、6点を2点のように換算してから加算した。

3. 日本版 State-Trait Anxiety Inventory : STAI

STAI は、40 項目からなり、一時的な不安症状(状態不安尺度)と特性的な不安症状(特性不安尺度)の強さを測定する尺度である。得点の換算は STAI マニュアル(肥田野・福原・岩脇ら, 2000)にしたがって行なった。

手続き 調査は、心理学の講義時間内に無記名で、集団実施された。調査開始時に文書と口頭で、調査

用紙の管理は厳重に行なわれ、個人のプライバシーは厳守されることを調査協力者に伝え、そのような手続きによる調査に同意する学生に回答を求めた。調査に要した時間は約 10 分であった。分析は統計パッケージ SPSS (Ver. 15.0J, SPSS Inc. 社) を用いて行った。

結果

ASSI の得点分布、合計得点の平均値および標準偏差を求めた。その結果を Table 3 に示した。

得点分布 ASSI 28 項目の低位尺度ごとの平均得

Table 3 得点分布と平均値および標準偏差

項目数	最小値	得点 最大値	平均点	SD
28	35 (28)	174 (196)	110.26	22.73

( ) とり得る最小値および最大値

Table 4 ASSI と各尺度間の相関

変数	Big Five					STAI	
	外向性	情緒不安定性	開放性	誠実性	調和性	状態不安	特性不安
ASSI	-.05	.41**	.05	-.02	-.14*	.41**	.44**

\*\* p &lt; .01 \* p &lt; .05

点, 標準偏差を算出した。尺度得点の正規性を検討するため, 下位尺度ごとの得点分布の歪度と尖度を算出した。歪度は -1.0 から +1.0 までの範囲内であったが, 尖度は4項目が -1.0 以下の値となった (No. 3, 7, 11, 20)。

信頼性 ASSI の尺度構成を確認するために, 28項目の回答に対して主成分分析を行い, 尺度の1次元性を確認した結果, 主成分負荷量が .40 に満たない項目が1項目 (No. 11) みられた。ASSI の28項目について Item-Total 相関分析を実施した。相関係数が .30 以下の項目が4項目あった (No. 1, 2, 15, 27)。男女別に分析を行った結果, そのうち3項目 (No. 1, 2, 15) は男性のみ相関係数が .30 以下であった。項目27の相関係数は男性 .14, 女性 .29 となり, 男女ともに低かった。男性では No. 5, 8 も .30 以下であった。

ASSI の安定性を再検査法により検討した。1回目の調査と2回目の調査結果 (n = 46, 男性11名, 女性35名) の間には, 強い相関関係が示された ( $r = .87, p < .001$ )。ASSI の内的整合性を検討するために, Cronbach の係数を算出した結果, 28項目の係数は .88 となった。男女別の係数は男性 .86, 女性 .90 と高い値を示し, 内的整合性は高いことが示された。項目を奇数番号と偶数番号に二分し, Spearman-Brown の公式を用いて, 折半法を実施した結果, 信頼係数は .82 であり, 信頼性が高いことが示された。以上の分析により ASSI の信頼性は十分に高いことが確認された。

#### 妥当性

##### 1. 尺度間の相関

ASSI の妥当性を検討するため, Pearson の相関係数を算出し, ASSI と BF20 および STAI との各尺度間の相関を求めた (Table 4)。

ASSI と BF20 の下位尺度である情緒不安定性の間に中程度の有意な正の相関 ( $r = .41^{**}$ ) がみられた。また, ASSI と STAI の間には, 状態不安および特性不安の両方に有意な正の相関が確認された。ASSI と状態不安の相関 ( $r = .41^{**}$ ) は特性不安との相関 ( $r = .44^{**}$ ) よりも低い値であったが, その差は小さかった。

##### 2. 構成概念妥当性

性別によって差がみられるかを検討するために平均値の差の検定 (t 検定) を行ったところ, ASSI 尺度全体の平均得点は女性が男性より統計的に有意に高かった ( $t = -3.371, p < .01$ )。BF20 の下位尺度別では, 女性は外向性得点が男性より有意に高く ( $t = 2.28, p < .05$ ), 情緒不安定性も同様に女性が有意に高かった ( $t = -2.87, p < .01$ )。STAI の状態不安, 特性不安についても, 女性の得点が状態不安, 特性不安ともに高かったが, 統計的に有意な差は認められなかった。

つぎに各項目の平均値を検討した。t 検定を行なった結果, 12項目で有意な差が見られた。No.1のみ男性は有意に得点が高く ( $t = 2.65, p < .01$ ), 残り11項目のうち, No. 4, 6, 12, 17, 22, 23, 25, 26, 27 は女性が男性より1%水準で有意に高かった。No. 3, 9 は5%水準で女性が男性より有意に得点が高かった。

##### 3. 性別の高低群比較

男性の高群と低群, 女性の高群と低群の4群に分けて, ASSI と BF20 の情緒不安定性, STAI の状態不安および特性不安の相関を算出した (Table 5)。女性の高群ではすべての下位尺度と有意な中程度の相関がみられた。男性では女性とは異なり, ASSI 低群のみで状態不安

Table 5 ASSI と各尺度間の相関：性別の高低群別

				Big Five		STAI	
				情緒不安定性	状態不安	特性不安	
ASSI	男性	低群	(n = 71)	.08	.24*	.27*	
		高群	(n = 47)	.22	-.06	.19	
	女性	低群	(n = 68)	.17	.19	.21	
		高群	(n = 85)	.42**	.41**	.38**	

\*\* p < .01 \* p < .05

と特性不安との間に弱い有意な相関がみられた。

### 考察

**尺度構成** 本研究で作成を試みた28項目からなる成人用感覚感受性尺度 (Adult Sensory Sensitivity Index : ASSI) の尺度構成を主成分分析およびItem-Total相関分析を用いて検討した結果、主成分分析結果のNo. 11, Item-Total相関分析結果のNo. 1, 2, 15, 27は、一次元性を支持しなかった。

No. 1「明るいところよりも暗い場所にいると落ち着く」およびNo. 15「小さな地震も察知できる」は、第1部の項目選択の際に行なった因子分析で低い因子負荷量 (.31) を示したが、項目内容から残された項目であった。No. 11「興奮して、なかなか眠れないことがある」およびNo. 27「よくぼーっとしていると言われる」は、閾値の低さから刺激過多のために脳が興奮した状態になることを仮定して作成された項目であるが、項目文が仮定した状態をうまく表していない可能性が考えられる。No. 2「痛みにも敏感である」は痛みに関する項目であるが、痛みは、明るさや騒音のように客観的に測ることが難しい知覚である。「痛み」という言葉の定義は個人差が大きく、そこに不安や性差などが複雑に関係しているため、「痛み」に対する敏感さと、敏感であるから痛みにも敏感であると安易に結びつけることはできないことを示唆している。

これら5項目についてはASSIの一次元性を支持していない項目として今後の研究では削除または内容の修正を考慮すべき項目であると考えられる。

**信頼性** ASSIの安定性を検討するため、検査-再検査法、Cronbachの係数による内的整合性、折半法による検討を行った。再検査法の結果は高い相関を示し、Cronbachの係数も高い値を示した。折半法による信頼性係数も同様に高い値を示したこ

とからASSIの信頼性は十分に高いことが示された。

**妥当性** BF20の下位尺度である情緒不安定性と中程度の正の相関を予想した通り、有意な正の相関 ( $r = .41^{**}$ ) が確認された。STAIの状態不安および特性不安とも中程度の正の相関を予想した結果、予想したとおりの中程度の有意な正の相関 (状態不安  $r = .41^{**}$ , 特性不安  $r = .44^{**}$ ) が確認された。敏感さはこれまで、否定的情動やパーソナリティの特徴の一つとして促えられてきた。しかし、本研究の調査を通じてASSIはBig Fiveの情緒不安定性 (神経症傾向) と関連があるが、その相関係数は高くなく、同じ概念ではないことが確認された。同じくSTAIで測られる不安とも異なる概念であることが確認された。

構成概念妥当性を確認するために男性の高群と低群、女性の高群と低群の4群に分けて、ASSIとBF20の情緒不安定性、STAIの状態不安および特性不安の相関を算出した。その結果、女性のASSI高群はBF20の情緒不安定性、STAIの状態不安、特性不安のすべてにおいて有意な相関がみられた。しかし、男性のASSI高群には、BF20の情緒不安定性、STAIの状態不安、特性不安のすべてで相関が認められなかった。結果として、感受性の高い女性を検出することができたが、男性では検出することができなかったことについて、第1部の調査で反転項目を残すことを考慮したが、分析結果から削除することにしたため、項目内容が感受性の高さを否定的に捉えられる項目が多くなってしまった。例えばNo. 12「怖がりである」に対して男性は女性よりも有意に得点が低かった。このことは“男性は怖がりであるべきではない”という性役割の理想が反映された可能性を否定できない。また、女性は男性よりも28項目中22項目の尺度得点が高く、12項目で男性と女性間に有意な差がみられた。感受性の高さは、一般的に社会的に望ましくない特徴であると考えられていることから、男性は女性と比較して率直な回答が得られなかった可能性が推測される。

## 総括

著者は、生得的な感覚の感受性を持つ人が、不安や緊張が高く、精神的健康度が低いとされていることに着目して ASSI の開発を始めた。感受性が、不安や緊張の高い人、抑うつ的な人、神経質な人、内向的な人などの特徴の一つとして捉えられてきた経緯があるが、本研究の調査を通じて、ASSI は Big Five の情緒不安定性 (神経症傾向) と関連はあるが、その相関係数は高くなく、同じ概念ではないことが確認された。同じく STAI で測られる不安とも異なる概念であることが確認された。ASSI の構成概念妥当性を検討した結果、ASSI によって感覚感受性の高い女性を検出することができたが、男性は異なる結果となった。本研究ではこのような性差がみられたが、その結果を単純に男女に固有な生物学的要因による差と決めつけることはできない。むしろ、「男性はこうあるべき、またはべきではない」といった乳幼児期からの経験や学習によってもたらされた社会的な性差の影響などが考えられるため、性差については、今後の検討課題である。以上のように ASSI の構成概念妥当性には問題が残された。

本研究で ASSI によって測定を試みた特徴は、感覚刺激閾の低さとそれにとまなう情動や認知の特徴であった。すべての項目がそれを目的に作成され選択された項目である。そのため、感受性を問う項目が多くなった。やはり、尺度の精度を上げるためには反転項目を入れるべきである。Dunn (2007) で述べられている感覚感受性の低い人を測る項目は、反転項目として使用可能であろう。例えば、"I don't notice when people come into the room." 「誰かが部屋に入ってきて気づかない」や "I enjoy being close to people who wear perfume or cologne." 「香水やオーデコロンをつけている人の近くにいたのを好む」などである。今回の 28 項目は、感受性を測る目的が明白である項目で構成されているため、これらの反転項目を尺度の中に入れることによって社会的望ましさのバイアスを弱めることができるだろう。

概念をより明確にし、以上のような点を修正・改良した上で男性と女性の間で得点差が見られた場合は、そのほかの多くの質問紙尺度と同様に男性と女性のカッティングポイントを変えて標準化を試みる

ことを考えるべきだろう。本研究では、大学生を調査対象者として尺度作成を試みたが、ASSI を大学生以外の成人に適用した場合の相違点についても検討する必要がある。また、病院やクリニックの協力を得ることができれば、健常群と臨床群の ASSI 得点の比較、また症状のタイプによって ASSI の得点がどのように異なるかを検討できるだろう。

調査 2 の結果から、感覚感受性の高さは情緒不安定性 (神経症傾向) と関連があることが示唆されている。情緒不安定性の高い人は、不安定で学習しやすい神経系を持つために、情緒不安定になり、不安や恐怖などの症状を学習しやすく、神経症になると説明される (Eysenck, 1973)。Aron (2006, 2010) も著書の中で不安障害を持つ人々の中には、感受性の高い人がいることを指摘している。不安障害に対しては、認知療法や認知行動療法の有効性が実証されているが、簡便な質問紙 ASSI によりクライアントの感受性を特定し、この特性を考慮に入れることにより、適切な臨床的アプローチを可能にするだろう。例えば、ある不適応行動が刺激に対する感受性によって引き起こされている場合、回避行動をとるのではなく、刺激の性質を知り、刺激に慣れること、ストレスとなる刺激に対する準備性や対処方略を学ぶことにより、クライアントの行動を適応的にすることが可能であると考えられる。

刺激に対する感受性の高い人々にとって、敏感な身体を持っていることを知ることは以下の点で有益であろう。感覚刺激の受け取り方に偏りを持っていることによる日々の生活の困難さを知ることができ、家族や周囲の人たちの理解を得ることを容易にするだろう。また、自分の特徴を認めることで自尊心を上げることができたり、環境を調整することなどにより個人の生活の質を上げることもできるだろう。感覚感受性の高い人は、低い人よりも静かな環境のほうが合っているだろうし、嫌悪的な環境にどのように適応していくべきか、その方略を考える上で ASSI の結果が役に立つだろう。

## 引用文献

- Aron, E. (2000). High sensitivity as one source of fearfulness and shyness: Preliminary research and clinical implications. In L. Schmidt & J. Schulkin (Eds.), *Extreme fear, shyness, and social phobia: Origins, biological mechanisms, and clinical outcomes*. New York: Oxford University Press. pp. 251-272 (Aron, E. N. (2006). 恐怖やシャイネスの

- 一要因としての高感受性 - 予備的研究と臨床上の意義 ルイス A. シュミット・ジェイ. シュルキン (編著) 貝谷久宣 & 不安・抑うつ臨床研究会 (監訳) 社会不安障害とシャイネス 日本評論社 313-344.)
- Aron, E. N. (2010). *Psychotherapy and the highly sensitive person: improving outcomes for that minority of people who are the majority of clients*. New York: Routledge,
- Aron, E. N. & Aron, A. (1997). Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 345-368.
- Brown, C., Tollefson, N., Dunn, W., Cromwell, R. & Fillion, D. (2002). The Adult Sensory Profile: Measuring Patterns of Sensory Processing. *The American Journal of Occupational Therapy*, 55(6), 608-620.
- Dunn, W. (2001). The sensations of everyday life: Empirical, theoretical, and pragmatic considerations. *The American Journal of Occupational Therapy*. 55(6), 608-620
- Dunn, W. (2008). *Living Sentionally: Understanding Your Senses*. London: Jessica Kingsley Pub.
- Evans, D. E. & Rothbart, M. K. (2008). Temperamental sensitivity: Two constructs or one?. *Personality and Individual Differences*, 44, 2008, 108-118.
- Evers, A., Rasche, J. & Schabracq, M. J. (2008). High sensory-processing sensitivity at work. *International Journal of Stress management*, 15(2), 189-198
- Eysenck, H. J. (1967). *The biological basis of personality*. C.C. Thomas. (梅津耕作・祐宗省三ほか (訳) (1973). *人格の構造 - その生物学的基礎* 岩崎学術出版社)
- 船橋亜希 (2012). 感受性の個人差に関する研究の概観 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 11(2), 29-34.
- 萩生田伸子・繁榎算男 (1995). 因子数選択のための新基準提案 日本心理学会第59回大会発表論文集, 439
- 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・Spielberger, C.D. (2000). *新版 STAI マニュアル* 実務教育出版
- Kagan, J. (1994). *Galen's prophecy: Temperament in human nature*. New York: Basic Books.
- Liss, M., Timmel, L., Baxley, K. & Killingsworth, P. (2005). Sensory processing sensitivity and its relation to parental bonding, anxiety, and depression. *Personality and Individual Differences*, 39, 1429-1439.
- 村上宣弘 (2006). *心理尺度のつくり方* 北大路書房
- Reiss, S. & McNally, R. J. (1985). Expectancy model of fear. In S. Reiss & R. R. Bootzin (Eds.), *Theoretical issues in behavior therapy*, San Diego, CA : Academic Press. pp. 107-121.
- Reiss, S., Peterson, R. A., Gursky, D. M., & McNally, R. J. (1986). Anxiety sensitivity, anxiety frequency and the prediction of fearfulness. *Behavior Research and Therapy*, 24, 1-8
- Smolewska, K. A., McCabe, S. B. & Woody, E. Z. (2006). A psychometric evaluation of the Highly Sensitive Person Scale: The components of sensory-processing sensitivity and their relationship to the BIS/BAS and "Big Five". *Personality and Individual Differences*, 40, 1269-1279
- 辻井正次 (2012). 発達障害者の適応評価尺度の開発に関する研究 厚生労働科学研究費補助金・総合研究報告書
- 和田さゆり (1996). 性格特性語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究 67, 61-67

(受理年月日 2012年9月10日)